

学習者用デジタル教科書 研修事例集

～行動変容を引き出す研修のアイデア～

令和6年度 学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業



目次

本書の見方	p.2
-------	-----

研修事例	p.4
------	-----

1.	群馬県教育委員会	5
2.	埼玉県教育局	11
3.	富山県教育委員会	18
4.	山梨県教育庁	25
5.	福岡県教育庁	31

Appendix	p.37
----------	------

はじめに

～授業や教科書の在り方を再考する機会に～

児童生徒1人1台端末環境と高速情報通信ネットワークが整備されてきた中、端末活用は、多くの学校や地域で、整備当初の「まずは使ってみるステップ」から「活用効果を追究するステップ」へと移行してきました。今後「新たな学びを模索するステップ」へとさらに移行していくものと思われます。そして、これまでの実証研究事業により、デジタル教科書の使用頻度が高いほどデジタル教科書の使用感を肯定的に捉えていることが明らかになっています。一方で、課題として、デジタル教科書をどのように授業で活用すれば良いか分からない、教員研修をどのように行えば良いか分からないという話もお聞きしています。

「教科書の発行に関する臨時措置法」第2条によると、教科書とは、「(略)教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書(略)」と示されています。繰り返しますが、教授の用に供せられる図書とされているのです。しかし、学習者用デジタル教科書は、これまでの教師が教えるための教科書から児童生徒が学ぶための教科書へと移行していると言えます。特に、児童生徒個々の実態に合わせて、教科書をカスタマイズできることは、子供差配の学びに大変有効に働いています。

そのような中、読むだけの教科書から書く教科書、聞く教科書、共有する教科書へと、さらに、これまでの一斉授業が主だった使い方から、児童生徒自身で学習が最適となるよう自己調整するような使い方へと、デジタル教科書の在り方を見直し、授業の在り方を変革していく必要があります。

そこで、「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」では、好事例を集めた「研修事例集」「授業改善事例集」を、ここに公開することにしました。学習者用デジタル教科書の活用の仕方にとどまらず、授業や教科書の在り方について、再考する機会にいただければ幸いです。

令和6年度
学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業

主査

中川一史

(放送大学・教授)



本書の見方

令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」では、全国から5つの都道府県教育委員会を選定し、同教育委員会が実施するデジタル教科書等を活用した指導に関する研修の改善に取り組みました。この取組は、有識者(p.39参照)の指導助言の下で、1つの教育委員会につき2回の研修をターゲットに行いました。

本書では、各教育委員会が実施した各回の研修の内容と成果を「研修事例」として、下図のとおり、3～4ページにとりまとめています。各事例の1ページ目では研修の全体像を、2ページ目以降では研修の各活動の詳細やポイントを紹介しています。

なお、本書はあくまで研修の概要を端的にまとめたものであり、更なる詳細については成果報告書もあわせて参照ください。

成果報告書(研修に関する調査研究): https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt_kyakasyo01-000041995_3.pdf

研修の概要 (各事例1ページ目)



研修の各取組の詳細 (各事例2～4ページ目)



成果報告書
(外部リンク)

各種動画
(外部リンク)

① 研修のねらいや各活動の流れ等、研修の全体像を紹介

② 各事例に関する成果報告書のQRコードから、詳細な内容の確認が可能

③ 研修の各活動を詳述するページを設け、取組の実施方法やその成果について紹介

④ 各活動を再現する際のポイントについて、有識者や教育委員会の担当者の声から可視化

⑤ デジタル教科書の活用意義や方法の理解につながる動画へのQRコードも記載

研修事例一覧

本書に掲載する研修事例は以下のとおりです。なお、No.間に「S」マークがついているものは、研修間に関連性があることを表しています。

県	No.	掲載事例	対象	研修の概要	実施方式	掲載ページ
群馬県	1-1 S	講義を通じて活用に関する指導助言のポイントを理解	指導主事	① 指導助言の際に必要な視点に関する 有識者の講義 を実施。 ② デジタル教科書に触れながら、指導助言の方策について受講者間で 意見交換 。	参集	p.5
	1-2	デジタル教科書を組み込んだ指導案を教員・指導主事で検討	指導主事 教員	① デジタル教科書の必要性や活用方法に関する 有識者の講義 を実施。 ② 各受講者が事前に作成した指導案を持ち寄り、 グループで改善案を検討 。 指導主事は、No.1-1の研修で得た視点をいながら実際に指導助言を実践。	参集	p.8
埼玉県	2-1	デジタル教科書を操作しながら、活用プランを具体化・意見交換	教員	① デジタル教科書活用の意義や事例に関する 有識者の講義 を実施。 ② デジタル教科書に触れ、機能を確認しながら活用方法について グループで検討 。 ③ 各自で研修を振り返り、自身の授業での デジタル教科書活用プランを検討 。	参集	p.11
	2-2	自治体間の意見交換を通じた、デジタル教科書のメリットの理解	指導主事	① デジタル教科書活用の意義や事例に関する 有識者の講義 を実施。 ② 講義を踏まえて感じたデジタル教科書のメリットや、現場の教員への指導助言のポイントに関して グループ協議 で検討。	オンライン	p.15
富山県	3-1	単元全体を通じたデジタル教科書の活用を検討	教員	① 受講者を取り巻く活用の現状についてグループ内で情報交換した後、デジタル教科書の意義や活用事例に関する 有識者の講義 を実施。 ② デジタル教科書の活用を組み込んだ単元計画について グループ協議 で検討。	参集	p.18
	3-2	特定の教科・授業に焦点化し、指導助言のポイントを検討	指導主事	① 事例動画を視聴した後、指導助言時のポイントに関する 有識者の講義 を実施。 ② 3教科×2校種の6グループに分かれて 指導助言のポイントを検討 。 ③ グループごとに検討したデジタル教科書の指導助言のポイントを 全体に共有 。	参集	p.21
山梨県	4-1	全県向けのオンライン研修で、デジタル教科書の活用を周知	指導主事 教員	① デジタル教科書活用の意義や事例について 有識者の講義 を実施。 ② 山梨県内の先進事例をゴールとして設定の上、段階的な授業改善の方向性を検討する グループ協議 を実施。	オンライン	p.25
	4-2	県内の先進事例から、活用のポイントや経緯を学ぶ	指導主事 教員	① 山梨県内の先進的な実践事例について 授業者から発表 。 ② 発表した事例を基に、活用のポイントや実践に至るまでの試行錯誤に関して、授業者及び有識者による パネルディスカッション を実施。	ハイブリッド	p.28
福岡県	5-1 S	受講者の実践に向け、公開授業で活用イメージを醸成	教員	① デジタル教科書を活用した 公開授業 を実施。 ② 公開授業を参観した感想や受講者の現状・課題を グループ協議 で意見交換。 ③ 受講者自身の実践に向け、授業の在り方に関して 有識者の講義 を実施。	参集	p.31
	5-2	受講者自身の実践動画を持ち寄り、意見交換	教員	① 第1回研修を踏まえ、各受講者が研修までにデジタル教科書を活用した授業実践を行い、 計画書・動画を作成 。 ② 撮影した授業動画をもとに更なる改善に向けた グループ協議 を実施。	参集	p.34

研修事例

講義を通じて活用に関する指導助言のポイントを理解



詳しく
報告書で読む
(p.16～)

研修前



- 多くの指導主事は、「デジタル教科書の活用の意義」や「授業における活用イメージ」に対する理解が不足しており、効果的な指導助言ができていない。



- 研修を受講した指導主事の全員が、デジタル教科書の活用に関する指導助言の見通しをもつことができた。
- 研修を受講した指導主事の大半が、研修後の学校訪問にて、実際に研修内容を活かした指導助言を行った。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ 有識者の講義を通して、デジタル教科書の活用の意義を理解するとともに、**指導助言において必要となる視点を獲得**する。
- ✓ 実際にデジタル教科書进行操作する機会を設定し、**授業での活用イメージを具体化し、指導助言の見通しをもつ**。

対象者

教員

—

指導主事

義務教育課・総合教育センター・教育事務所 指導主事 7名

実施方式

参集

オンライン

ハイブリッド

研修の流れ

研修前の取組

- 個別 - 事前にオンラインでの意見交換会を実施し、各受講者の現状と課題について情報交換。
- 個別 - 各受講者に、サンプル版のデジタル教科書を案内し、研修前に操作するよう促す。

レクチャー



有識者の講義

- 全体 - 群馬県の教育ビジョンである「教師が“～させる”授業から児童生徒が“～する”授業への転換」を軸に、学習者主体の学びの必要性やデジタル教科書の活用の意義を解説。
デジタル教科書の効果的な普及促進に当たっては「活用促進の3STEP」があることを説明。
活用段階ごとに必要となる指導助言の視点を獲得。

【準備物】

- 講義資料
- プロジェクター

➡ 詳細は p.6

ワークショップ



意見交換

- グループ - 実際にデジタル教科書进行操作し機能や操作感を確認した上で、「教員におすすめできる活用方法」について各受講者同士で検討。
- 全体 - 各受講者が本研修を振り返り、管下の現状を踏まえた自身の取組を全体に共有。
研修の進行役が各受講者の発言を総括し、研修後の指導助言の方向性について全体で確認。

【準備物】

- デジタル教科書（サンプル版）
- 操作用端末

➡ 詳細は p.7

講義を通じて活用に関する指導助言のポイントを理解



詳しく
報告書で読む
(p.16～)

レクチャー



80分

有識者の講義

取組のねらい

- 学習者主体の学びの必要性や、それらの学びの実現に向けたデジタル教科書の活用の意義を理解することができる。

取組内容

取組結果

■ 前半:「指導観の転換の必要性」

- 学習者一人ひとりが主体的に学習を進めていくためには、デジタル教科書が必要不可欠であることを説明。
- その上で、教員に活用を促すためには、活用方法だけでなく、子供の学びを促進するための関わり方を伝え、教員の「指導観」の転換を図ることが重要であると説明。

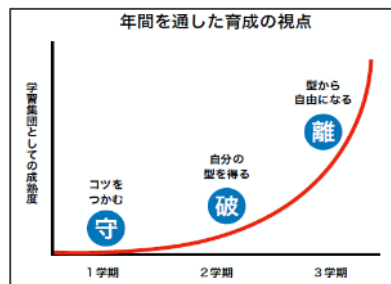
参考動画



講義に関連する「デジタル教科書の活用の意義」や「具体的な活用方法」の理解を促すための動画を公開しています。左記QRコードから参照の上、研修等に活用ください。

■ 後半:「活用促進の3STEP」

- デジタル教科書の活用には段階(以下3STEP)があり、教員と同様に指導主事もその段階を理解し、指導スキルを高めていく重要性を説明。
- ◆ **STEP1 機能を知り試行する** : まずは、デジタル教科書を繰り返し活用することで、機能を知り使い方の「コツ」を掴む。
- ◆ **STEP2 目標達成に活用する** : 目的を明確にして活用することで、教員・学習者がともに目標達成に向けた活用の「型」を習得する。
- ◆ **STEP3 よりデジタル化する** : 学び方を子供たちに託すことで、習得した活用の「型」をアレンジし、自分なりの活用法を見いだす。



▲「活用促進の3STEP」について年間を通した育成の視点とともに解説

■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度 [N=7]



- 本研修の理解度を問う質問では、全ての受講者から肯定的な回答を得ていることから、デジタル教科書の意義や指導助言に必要となる視点を理解することができたと考えられる。

理解した内容(自由記述回答から抜粋)

- デジタル教科書などICT活用は、目的でなく手段であることを押さえ、活用の目的を明確化する働きかけが重要であると理解した。
- 現場の教員に対し、単に活用を促すだけでなく、「何故、使うのか」、「育成したい子供の資質・能力は何か」を問い返し、目的達成に向けた活用を一緒に考えていくことが重要だと分かった。



ポイント解説

活用促進に向けたステップを示し、段階ごとの取組を明確化

- デジタル教科書の活用をどのように進めてよいか分からないという声は、教員・指導主事ともによく聞かれます。活用は段階を踏んで進めていくべきという視点を持ち、まず各自がどの段階にあるのか、何に取り組むべきかを意識することが今後の見通しにつながります。また、学校現場にデジタル教科書の意義が十分に浸透していないと、活用が目的化しがちです。指導助言に当たっては、特にSTEP2を意識し、活用の目的の明確化が重要です。(札幌国際大学 岩崎教授)

講義を通じて活用に関する指導助言のポイントを理解

詳しく
報告書で読む
(p.16～)

ワークショップ



20分

意見交換

取組のねらい

- ・ 実際にデジタル教科書を操作しながら、活用に関する具体的なイメージをもつことができる。
- ・ 指導助言に当たっての見通しをもつことができる。

取組内容

■ 前半:「指導助言における方策の検討」

- ・ 事前に、全員分の端末を用意し、学習者用デジタル教科書(サンプル版)を操作できる環境を準備。
- ・ 講義を踏まえ、「教員におすすめできるデジタル教科書の活用方法」を、実際にデジタル教科書を操作しながら検討。まず、実際の操作を通じて、デジタル教科書の機能を確認・把握した後、各機能を「資質・能力の育成」や「外国語の4技能の向上」に活用できるかを議論した。



■ 後半:「今後の取組方針の全体共有」

- ・ 前頁の「有識者の講義」や上述の「指導助言における方策の検討」を振り返り、各受講者から、管下の現状も踏まえた自身の今後の取組について発言。
- ・ 進行役の指導主事が、各受講者の発言を基に、共通する内容や特に注力すべき課題等を総括し、第2回研修(p.8)や以降の取組方針を全体で確認。



▲ デジタル教科書を操作しながら、指導助言の方策を検討する様子



ポイント解説

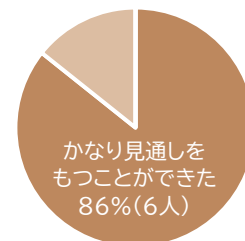
デジタル教科書の実機を用いた検討により指導助言イメージを具体化

- ・ 多くの指導主事は、デジタル教科書を活用した授業経験がなく、日頃実機に触れる機会も少ないです。そのため、実際にデジタル教科書に触れ、その機能や操作感を確かめながら検討を行うことで、具体的な指導助言イメージを掴むことができます。
- ・ 指導助言の自信をさらに高めるためには、得た知識を使って実際に指導助言することが重要です。例えば、教員に対する指導助言を組み込んだ研修を併せて実施することも有効と考えます。(本書 p.8参照) (群馬県教育委員会 相川 指導主事)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

指導助言に当たっての見通しの獲得 [N=7]

まあまあ
見通しをもつ
ことができた
14%(1人)

- 実際にデジタル教科書に触れながら指導助言の方策を検討したことで、活用イメージを具体化するとともに、以降の取組の見通しをもつことができたと考えられる。

研修後の指導助言の内容(自由記述回答から抜粋)

- ・ 音声機能や書き込み機能を使うことで子供たちが自分のペースで学習を進められるようになるため、学が手段の1つとして積極的に取り入れるように伝えている。
- ・ 子供が、デジタル教科書を使って主体的に学べるよう、教師側で工夫していくことが重要だと伝えている。
- ・ 教師と生徒でデジタル教科書活用のよさを共有することが重要であり、このことを普段の授業から意識するよう促している。

デジタル教科書を組み込んだ指導案を教員・指導主事で検討



詳しく
報告書で読む
(p.30～)

研修前



- 現場の教員は、学習者用デジタル教科書を活用した具体的な授業イメージをもてず、実践に繋がっていなかった。
- 指導主事は、デジタル教科書の活用に関する指導助言の経験が少なく、自信をもてていなかった。



- 研修を受講した教員の約7割が研修以降に授業実践を行うとともに、デジタル教科書の効果を実感することができた。
- 研修を受講した指導主事の全員が、デジタル教科書活用に関し、自信をもって指導助言できるようになった。

研修後



研修の概要

基本情報



- 研修のねらい
- 各校で中核となる6年目教員を対象に指導案検討の機会を設け、**実際の授業におけるデジタル教科書の活用イメージを獲得**する。
 - 指導主事も指導案検討に関与し、実際に教員への指導を行うことで、**指導助言に当たっての自信をもつ**。

対象者	教員	小・中学校 6年目教員(外国語科) 26名		
	指導主事	義務教育課・総合教育センター・教育事務所 指導主事 7名		
実施方式	参集	オンライン	ハイブリッド	

研修の流れ

研修前の取組

レクチャー



有識者の講義

ワークショップ



グループ協議

研修後の取組

- 個別 - 事前アンケートにより、受講者の現状と課題を把握。
- 個別 - 各受講者がデジタル教科書の活用を組み込んだ指導案を事前に作成。
- 全体 - 一斉指導型の授業における教員と学習者の発話量の割合を示し、「学習者主体の学びへの転換」の必要性を説明。
- グループ - 学習者の立場を体感する2種類のワークを通して、デジタル教科書活用の意義を説明。
- 全体 - 具体的な授業での活用イメージの獲得に向け、先進事例の動画の視聴や群馬県の教育ビジョンに関連付けながら活用のアイデアを紹介。
→ 詳細は p.9
- グループ - 各受講者が事前に作成した指導案を持ち寄り、デジタル教科書の活用を織り交ぜながら内容をブラッシュアップ。
指導主事も適宜各グループの検討に参加し、議論を活性化。
→ 詳細は p.10
- 個別 - 作成した指導案を基に授業実践し、次回の6年目教員研修において実践報告を実施。

【準備物】

- 講義資料
- プロジェクター

【準備物】

- 指導案



レクチャー



60分

有識者の講義

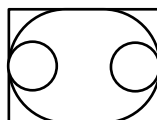
取組のねらい

- 「主体的・対話的で深い学び」の視点からデジタル教科書の活用の意義を理解することができる。

取組内容

■ 前半:「デジタル教科書の活用の意義」

- 一斉授業では、学習者の発話量が教員に比べて著しく少ないことを示し、教員主導から学習者主体の学びへの転換が求められていることを説明。
- 上記のワークを通じて、「教員が一方向的に伝えるだけでは、学習者が期待通りに捉えているとは限らず、その捉え方も様々である」ということを、学習者の立場から体感。学習者が自身に合った方法で学びを進めることが重要であり、その際に、デジタル教科書等が役立つことを説明。
- ◆ **ワーク①**: 図の形状を言葉だけで他者に伝え、再現する
- ◆ **ワーク②**: 解釈が分かれる絵を示し、何に見えるか話し合う



▲ワーク①で
題材とした図形



▲左の図形を
口頭説明から
受講者が
再現したもの



▲ワーク②で題材とした絵
同じ絵を参照しつつも受講者から
は異なる見方が複数提示された。

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度 [N=21]

どちらかといえば
理解できた
14%(3人)

概ね理解できた
86%(18人)

- 本研修の理解度を問う質問では、回答した全ての受講者から肯定的な回答が得られており、研修を通じて、「主体的・対話的で深い学び」に繋がるデジタル教科書の活用方法やその必要性を理解していると考えられる。

理解した内容 (自由記述回答から抜粋)

- 自分の発想が、一斉指導をベースにしていることに気付いた。学習者がデジタル教科書を用いながら自分のペースで学ぶことで、個別最適な学びを実現できると発見することができた。
- 教員から授業の内容を一方向的に伝えても思ったより伝わっていないかもしれないと気付かされた。各々が自分のやり方で学んでいくことが重要であると理解した。



ポイント解説

学習者の立場を体感するワークから、デジタル教科書の必要性を訴求

- 講義で実施したワークは受講者自らが学習者の立場を体験するものであり、学習者主体の学びやデジタル教科書の重要性について効果的に訴求しています。従来の教員主導の授業では達成できないことがあり、それがいかにデジタル教科書によって補完されるかを示すことが有効です。
- この他にも、研修冒頭に、短時間でも良いので模擬授業形式により学習者の視線を体験する時間を設ける等の取組も効果的です。(札幌国際大学 岩崎教授)

デジタル教科書を組み込んだ指導案を教員・指導主事で検討



詳しく
報告書で読む
(p.30～)

ワークショップ



105分

グループ協議

取組のねらい

- ・ 単元目標や本時のねらいの達成に向け、デジタル教科書を活用した授業計画を立案できる。(教員)
- ・ デジタル教科書の活用を組み込んだ単元構想に対する指導助言ができる。(指導主事)

取組内容

■ 指導案検討の主な流れ

- ・ 地区ごとに3～4人のグループを編成。
- ・ 受講者が事前に作成した指導案ごとに、以下(ア)(イ)を繰り返した。
(ア) 指導案を作成した受講者からの説明(5分)
(イ) グループで、同指導案の改善に向けた協議(25分)
- ・ 指導主事は2グループを担当し、巡回しながら順次指導助言。
- ・ 指導案のフォーマットは群馬県教育委員会が標準的に示すものを使用。

■ 協議の＜視点＞

1. 本単元で身に付けさせたい資質・能力
2. 単元計画(単元目標、単位時間の繋がり)
3. 個別最適な学び・協働的な学びの視点からの授業改善



▲グループで検討を行う様子



▲指導主事が議論を活性化

取組結果

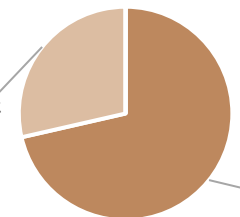
■ 受講者アンケートの結果

研修以降の実践状況(教員) [N=8]

- ・ スピードを変化させてシャドウイングしたり、日本語訳を見ながらリピート練習をしたりなどができるため、**学習の個別化に向け活用している。**
- ・ 発音が確認できたり、英作文の手助けになるコンテンツもあるため、特に**個別学習時に活用している。**
- ・ 教科書の問題を確認したり、チャンツやジングルを聞くなど、**個別最適な学びを意識して活用している。**

自信の獲得(指導主事) [N=7]

まあまあ
自信をもつ
ことができた
29%(2人)



とても
自信をもつ
ことができた
71%(5人)

- 指導主事がグループ協議に参加し、現場の教員に実際に指導助言を行うことで、指導助言に当たっての自信を獲得できたと考えられる。



ポイント解説

学習活動の意図を明確化し、目的達成に向けた活用を検討

- ・ デジタル教科書の活用を考える際、活用自体が目的化してしまうことが多くあります。そのため指導案の検討に当たっては、“活動の意図”に注意を向け、“子供の資質・能力の育成”に繋がる活用場面を検討することが重要です。
- ・ また、検討の際には、指導主事も適切に介入し、「何故その活動を行うのか」「身に付けさせたい資質・能力は何か」など“活動の意図”を問い返すことにより、各受講者に目的達成に向けた活用を意識付けることができます。(群馬県教育委員会 柳川 指導主事)

デジタル教科書を操作しながら、活用プランを具体化・意見交換



詳しく
報告書で読む
(p.48~)

研修前



- ・ 同じ町内でも先進的に活用する教員とそうでない教員とで差が広がっている。
- ・ 外国語の4技能の中でも「聞くこと」に偏ってデジタル教科書が活用されていた。



- ・ 研修を受講した8割以上の教員が、デジタル教科書を授業で活用するようになった。
- ・ 外国語の全ての技能に関して、デジタル教科書の活用方法を考えることが出来た。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ 実際にデジタル教科書を操作し、**具体的な活用イメージを醸成**した上で、活用レベルに差がある教員間の交流を通して、活用への理解を深める。
- ✓ 外国語の4技能を軸に活用方法を検討することで、「聞くこと」以外の領域にも、**活用の幅を広げる**。

対象者	教員	小学校教員9名、中学校外国語科教員5名		
	指導主事	—		
実施方式	参集	オンライン	ハイブリッド	

研修の流れ

研修前の取組

レクチャー
有識者の講義 25分

- 個別 - 事前アンケートにより、受講者のデジタル教科書活用の現状と課題感を把握。

- 全体 - 多様化する子供たちに対応する「学習者主体の学び」の必要性を説明し、デジタル教科書の機能や授業動画の紹介を通じて、効果的に活用するためのポイントや授業づくりの考え方を説明。

【準備物】
・ 講義資料 等

➡ 詳細は p.12

ワークショップ
活用方法の検討 75分

- 個別 - 実際にデジタル教科書に触れながら機能を確認し、外国語の授業で活用できそうな機能や授業場面を付箋に書き出す。

- グループ - 各自が記入した付箋を、模造紙上で外国語の4技能ごとに整理しながら、グループで活用方法を議論。

- 全体 - グループで整理した模造紙を示しながら、協議内容を全体に発表。

【準備物】
・ 操作端末
(受講者が持参)
・ 模造紙、付箋、
マーカー

➡ 詳細は p.13

リフレクション
活用プランの作成 25分

- 個別 - 自身の授業における「デジタル教科書活用プラン」をオンライン上のワークシートで整理。

- グループ - ワークショップと同じグループで、各自のデジタル教科書の活用プランを発表し、意見交換を実施。

【準備物】
・ ワークシート

➡ 詳細は p.14



レクチャー



25分

有識者の講義

取組のねらい

- 「学習者主体の学び」をキーワードとしながら、デジタル教科書の活用の意義・効果を理解することができる。

取組内容

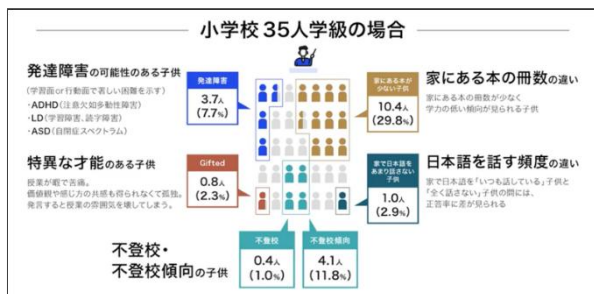
■ デジタル教科書の活用の意義や活用方法に関する講義

- 講義冒頭では、不登校や発達障害のある子供等、多様な子供たちの学び方に対応する必要性を示し、自ら学習方法を選択・決定する「**学習者主体の学び**」の必要性を強調。デジタル教科書の機能や活用方法を紹介し、これらを活用して、子供たちが自ら学習方法を選択することの重要性を説明。
- 実際の授業場面や文科省が公開している動画を基に、「**学習者主体の学び**」のポイントを紹介。

参考動画



講義に関連する「デジタル教科書の活用の意義」や「具体的な活用方法」の理解を促すための動画を公開しています。左記QRコードから参照の上、研修等に活用ください。



▲学級内に様々な特性のある子供が存在することを説明した資料のイメージ(出典:右上「参考動画」)

「学習者主体の学び」のポイント(一部抜粋)

- 授業の屋台骨を一斉指導にしない。
- 学習のゴールや計画等の授業情報を子供たちと共有する。
- 個別最適な学びに取り組む時間を十分確保する。
- 子供たちが勝手に学び始めるような学習環境を整備する。

▲講義内で説明された「学習者主体の学び」のポイントの一部

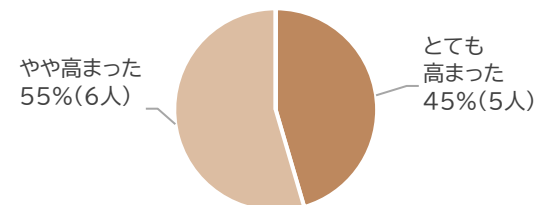
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容(自由記述回答から抜粋)

- 今まで行われてきた全体指導中心の授業ではなく、生徒が学び方を選んで学習を進めていくスタイルに変えていかなければならないと改めて分かった。
- 多様化する子供たちに対応するためには従来型の教育には限界があるという話を聞き、デジタル教科書を活用した指導の方向性が見えた。
- 個に応じた学習手段として、デジタル教科書がとても有効だと分かった。
- デジタル教科書も学習方法の選択肢の一つとし、子供たちに自己決定させることが大切だと分かった。

活用に対する意欲の変化 [N=11]



- デジタル教科書の活用の意義を理解したことで、全ての回答者が活用への意欲を高めたと考えられる。



ポイント解説

教員にとって身近な事例を示し、受講者の関心を喚起

- デジタル教科書に馴染みがない教員は、そもそもデジタル教科書の必要性を感じていないことが多いため、「**学習者主体の学び**」の実現を切り口に解説をすることで、デジタル教科書に馴染みがない教員の関心も惹きつけられます。(放送大学 小林 准教授)



ワークショップ



75分

活用方法の検討

取組のねらい

- デジタル教科書の多様な活用方法を理解し、授業での活用イメージをもつことができる。

取組内容

■ 活用方法の検討の主な流れ

- 受講者がそれぞれデジタル教科書に触れながら機能を**確認**し、「外国語の4技能」を軸に、**授業で活用できそうなデジタル教科書の機能や授業場面**を付箋に書き出す。
- グループで各自が記入した付箋を模造紙上で**4技能ごとに整理**しながら、活用方法を共有・議論。
- 各グループが整理した模造紙を示しながら、協議内容を全体に発表。

■ グループの編成方法

- 学校種ごとに、4～5人でグループを編成。
- 事前アンケートで、デジタル教科書を積極的に活用している受講者を把握し、グループに1名ずつ配置し、**議論のリード**を依頼。

聞くこと

単語練習時に
「字幕機能」を使い、
音と文字の両面から
インプットさせる

読むこと

内容理解の補助として
「マーカー機能」で
重要なセンテンスを
強調させる

話すこと

モデル会話の動画を
視聴し、発表活動の
ゴールを意識させる

書くこと

「ワークシート機能」で
発表原稿を作り、
友達と見せ合いながら
ブラッシュアップ

▲4技能別に活用場面を整理(イメージ)



◀ デジタル教科書に触れながら、
授業で活用できそうな機能を
付箋に書き出す様子

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で理解した内容(自由記述回答から抜粋)

- 実際にデジタル教科書を操作しながら、**色々な活用方法を考える**ことができた。
- 他校の先生方から新しい活用を学ぶことができた。
また、疑問点も出し合い、**多面的に議論**できた。
- デジタル教科書には面白いツールがたくさんあり、児童が外国語に触れるきっかけとして活用できると感じた。

今後の取組の方向性(自由記述回答から抜粋)

- 授業の導入部分で動画コンテンツを用いて本文の概要を確認し、本文の内容理解に書き込み機能を活用したい。
- 歌を活用して、英単語のインプットに活用したい。
- デジタル教科書で音声を確認し、「話すこと」にも活用したい。
- 多くの受講者が、ワークショップで検討した外国語の4技能ごとの活用方法をもとにして、**特定の学習場面での活用に取り組む**と回答しており、各自が授業における具体的な活用イメージを獲得できていることが分かった。



ポイント解説

デジタル教科書の利用環境に近い受講者でグループを組み、同僚性を刺激

- 本研修では、グループ協議を同じ地域の受講者同士で行うことで、議論の活性化に繋がりました。
- デジタル教科書は発行者によって機能が異なりますが、**同地域であれば、同一の教科書が採択されているため、教科書の題材と機能を紐づけて具体的な議論を行うことができます。**グループを同じ校種で構成することで、「同僚性」から「自分も同じ点で悩んでいる」といった共感を伴う議論を行うことが期待できます。(放送大学 小林 准教授)

デジタル教科書を操作しながら、活用プランを具体化・意見交換

詳しく
報告書で読む
(p.48～)

リフレクション



25分

活用プランの作成

取組のねらい

- デジタル教科書を活用した授業の具体的な計画を立てることができる。

取組内容

■ 活用プランの作成の主な流れ

- 受講者それぞれで、講義・ワークショップを振り返りながら、自身の授業におけるデジタル教科書活用プランを、オンライン上のワークシートに作成。
- ワークシートでは、外国語の4技能ごとに自身の授業での活用場面と、デジタル教科書等を活用した手立てを記入。
- その後、前段のワークショップと同じグループで、各自のデジタル教科書活用プランを発表し、意見交換。

実際に作成された活用プランの例 ▶

聞くこと

【活用場面】 語彙のインプット

【手立て】

- 動画の再生速度を変え、自分に合ったスピードで練習。
- 字幕を付け、文字と結びつけ。

読むこと

【活用場面】 本文の内容理解

【手立て】

- 本文の中で分からない箇所は、読み上げ機能により、音声面からも内容理解。

話すこと

【活用場面】 発表に向けた練習

【手立て】

- 読み方の分からない文や単語を音声機能で復習し、正しく話せるようにする。

書くこと

【活用場面】 原稿作成

【手立て】

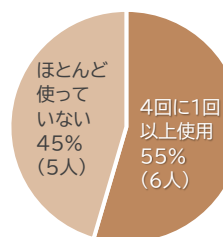
- ワークシートに考えを記入。
- ペアを組み、相手のワークシートにアドバイスを記入。

取組結果

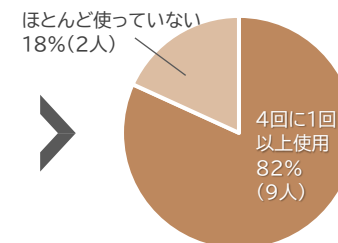
■ 受講者アンケートの結果

デジタル教科書の使用頻度の変化 [N=11]

研修前



研修2か月後



- 活用レベルの異なる教員同士の交流により、デジタル教科書活用の動機付けがなされ、使用頻度が上昇したと考えられる。

研修後に感じた活用の効果（自由記述回答から抜粋）

- 学級全体で音声を確認する場合は個人に合わせるのが難しかったが、音声を聞く回数を子供たち自身が必要に応じて調整できる点が良いと感じている。
- デジタル教科書を活用するとインプットをスムーズに行うことができたので、子供たちは自信を持ってアウトプットすることができていた。



他の教員との交流で得た気づきを基に、自身の活用プランを検討

- デジタル教科書の活用場面は、外国語の4技能や活用する機能によっても様々であり、教員ごとにアイデアが異なります。デジタル教科書の活用にまだ不慣れな教員もいる中では、他の教員から得られる気づきは非常に多いです。普段の授業と同様に、個別・協働・全体と活動の形態を変えながら、発散型で活用の方法を検討しつつも、最後には、受講者が個別に思考する時間を設け、自身の「活用プラン」として収束させることで、実践的な「スキル・技能等の習得」につなげられます。
- 次なるステップとして、実際の授業に落とし込みながら活用を検討する取組を行うことで、授業の流れに沿った活用を考えられるようにと考えています。（埼玉県西部教育事務所 山井 指導主事）

自治体間の意見交換を通じた、デジタル教科書のメリットの理解



詳しく
報告書で読む
(p.61～)

研修前



- デジタル教科書に触れたことのない指導主事も多く、活用の意義があまり理解されていなかったため、授業における活用についての指導助言が困難であった。



- 研修を受講した全ての指導主事が、デジタル教科書の活用の意義を理解することができた。
- 約9割の指導主事が、デジタル教科書を活用した授業づくりに関する指導助言の見通しをもつことができた。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ 有識者の講義を通して、デジタル教科書の活用の意義や具体的な事例を知り、**デジタル教科書を活用するメリットを指導主事自身が理解する。**
- ✓ 指導主事同士で、**授業づくりという視点から指導助言のポイントを検討・議論**することで、実際の指導助言の見通しをもつことができる。

対象者	教員	—
	指導主事	市町村教育委員会 指導主事 62名
実施方式	参集	オンライン
	ハイブリッド	

研修の流れ

ワークショップ



グループ協議

グループ

- アイスブレイクとして、管内の学校におけるデジタル教科書の使用状況や、活用に関して指導助言する際の課題感を情報交換。

【準備物】

- ・ 受講者が各自の端末から参加

レクチャー



有識者の講義

全体

- 課題に対して自ら学んでいく「探究的な学び」を日本の子供たちが進められていない現状について紹介し、教師が授業観を転換する必要性を説明。また、転換に向けたデジタル教科書の活用の意義を解説。
- デジタル教科書の活用に向けた最初の一步となる事例を中心に紹介。

➡ 詳細は p.16

【準備物】

- ・ 講義資料

ワークショップ



グループ協議

グループ

- 講義を受けて感じたデジタル教科書のメリットや、受講者の現状と課題についてグループで意見交換。どのように教員への指導助言を行うかを検討し、ワークシートにまとめる。

全体

- グループでの協議内容について、ワークシートを画面共有しながら全体に発表。

個別

- グループでの意見交換や全体での発表を踏まえ、各受講者がワークシート内の「今後の学校訪問等で指導していくこと」を検討。

【準備物】

- ・ ワークシート

➡ 詳細は p.17

自治体間の意見交換を通じた、デジタル教科書のメリットの理解



詳しく
報告書で読む
(p.61～)

レクチャー



有識者の講義

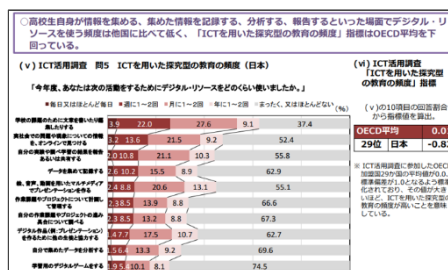
取組のねらい

- ・「探究的な学び」に向けた授業観の転換や、それに向けたデジタル教科書の活用に関する理解を深める。

取組内容

■ 前半:「探究的な学び」の必要性

- ・PISA調査(OECD加盟国を中心に3年ごとに実施する学習到達度調査)の結果を引用し、課題に対して自ら学んでいく「探究的な学び」を日本の子供たちが進められていない現状があることを説明。
- ・「探究的な学び」に向けては、子供たちが学習手段を自己選択・自己決定しやすいデジタル教科書の活用が有効であることを解説。



▲PISA調査結果を引用しながら説明

■ 後半:活用事例の解説

- デジタル教科書の活用に向けた最初の一步となる事例や、「探究的な学び」の事例を、文部科学省が公開している事例集等を用いて紹介。



データや具体的な事例を取り上げながら、
活用の意義を訴求

- ・ PISA調査結果等のデータを示しながら説明することにより、「探究的な学び」の意義や、その実現に向けたデジタル教科書の必要性や効果について、受講者に訴求することができます。
- ・ 事例集に記載されている「デジタル教科書の活用ポイント」や、有識者・授業者の声を取り上げながら、その内容を具体的に解説することで、受講者が指導助言する際のイメージアップに繋げることができます。(放送大学 小林 准教授)

デジタル教科書による
授業改善実践事例集

文部科学省では、これまでデジタル教科書を活用した授業改善の実証に取り組んでいます。全国各校での実践事例を取りまとめているので、あわせて参照・活用ください。



令和5年度
実践事例集
([リンク](#))



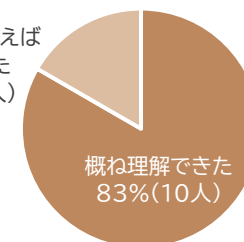
令和6年度
実践事例集
(リンク)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度 [N=12]

どちらかと言えば
理解できた
17%(2人)



- 本研修の理解度を問う質問では、全ての回答者から肯定的な回答を得ていることから、デジタル教科書の活用の意義や具体的な活用事例を理解することができたと考えられる。

理解した内容(自由記述から抜粋)

- ・ デジタル教科書等を活用した授業は個別最適な学びに適していることを改めて確認できた。また、学習ツールを「子供が自己選択・自己決定することが重要である」とも学べた。
- ・ 子供たちの多様な学び方に対応するための授業改善のツールの一つとして、デジタル教科書が存在することを理解できた。



ワークショップ



60分

グループ協議

取組のねらい

- 授業でのデジタル教科書の活用に関する指導助言の見通しをもつことができる。

取組内容

■ 前半:指導助言のポイントを検討

- オンラインのワークシートを使用し、グループで意見交換。
- 講義を受けて感じたデジタル教科書を使用するメリット(①)や、受講者の現状と課題(②)について整理。あわせて、各自治体における活用事例についても情報交換。
- これらを踏まえて、「授業づくりのための視点」という切り口から、どのようにデジタル教科書を活用した授業に関する指導助言を教員に行うかを協議し、ワークシートにまとめる(③)。

■ 後半:学校訪問で指導することを整理

- グループでの協議内容について、ワークシートを画面共有しながら、全体に発表。
- 研修全体を踏まえ、各自で「今後の学校訪問等で指導していくこと」を整理(④)し、代表者数名が全体に共有。

1 グループ協議の記録

○学習者用デジタル教科書を使用するメリット
個別最適な学びや自己調整を行う場面等に活用できる。
特別支援的な視点からの援助ができる。

○現状と課題
教員間や学校間の格差があり、指導者用は使うが学習者用は利用できていない。また、利用場面等がわからずに使っていない。学習者用のデジタル教科書を教育委員会では利用できない。
一斉授業からの脱却。
個別最適な学びの後の見取りをどうするか。

○柱立て 指導助言のポイント(授業づくりのための視点)
まずは、音読の場面で指導者用やALTの後に続いて行うのではなく、児童生徒が自分の聞きたい場面や速さに合わせて、音読をさせる。
ユニバーサルな視点から(文字の反転、ルビ、読み上げ)支援できる。
録画・録音の機能を使って、ポートフォリオ的に利用し、メタ認知する。

○今後の学校訪問等で指導していくこと(個人)
●まずは、音読の場面で、毎日ではなくても活用するよう指導する。
●児童生徒の興味・関心に合わせた活用ができることを指導する。

2

3

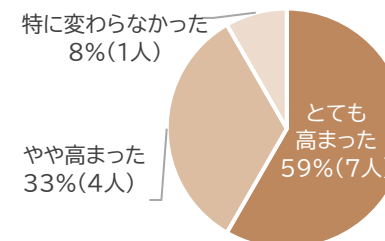
4

▲実際に用いたオンラインのワークシート

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

教員への指導助言の見通し [N=12]



- 受講者間での意見交換を通して、指導助言のポイントをまとめたことで、回答した受講者の多くが指導助言の見通しをもつことができたと考えられる。

今後指導助言していきたい点(自由記述回答から抜粋)

- 「探究的な学び」への転換とセットでデジタル教科書の活用について伝えることで、「最適な学習方法を児童生徒が選択できる」ことの良さを指導したい。
- デジタル教科書を使うこと自体を目的化せず、活用することでどのような力を伸ばすか考えることの大切さを伝えたい。
- 管内の学校で有効な活用例があれば、それを他校にも横展開する。



ポイント解説

自治体間での意見交換や事例共有を通じた活用の動機付け

- 自治体や学校によってデジタル教科書の活用状況が異なることを指導主事は認識しています。
- 受講者間の意見交換や事例共有を通じて、先進的な取組を知ることにより、デジタル教科書の活用へのモチベーションを高めることができます。大規模な研修で、デジタル教科書の活用の意義への理解を深めた上で、具体的な指導助言のイメージを深める研修を少人数で行うことで、より効果的に実際の指導助言へと繋がれると考えています。(埼玉県教育局 秋元 指導主事)

単元全体を通じたデジタル教科書の活用を検討



詳しく
報告書で読む
(p.75～)

研修前



- 多くの教員は、デジタル教科書の必要性を理解しておらず、授業において活用できていなかった。
- また、教員間で活用状況の差も広がっている。



- 9割を超える教員が、デジタル教科書の必要性や効果的な活用方法を理解することができた。
- 8割を超える教員が、デジタル教科書活用に関する意欲を現状より高めた。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ デジタル教科書を操作しながら単元計画を検討し、活用イメージを具体化するとともに、授業のねらいの達成に向けた活用方法を理解する。
- ✓ 活用レベルの異なる教員でグループを組成し教員間の情報交換を促すことで、各自の活用状況を再認識させ、明確な課題意識を醸成する。

対象者

教員

小学校教員175名、中学校外国語科教員57名

指導主事

—

実施方式

参集

オンライン

ハイブリッド

研修の流れ

研修前の取組

個別

各受講者が自校のデジタル教科書の活用状況を把握する。

個別

各受講者が事前に学習者用デジタル教科書を操作し、活用のアイデアを検討する。

レクチャー



有識者の講義

グループ

事前に把握した各受講者の学校におけるデジタル教科書の活用状況について、グループ内で情報交換し、受講者間で現状や課題に関する共通認識を醸成。

全体

有識者が、デジタル教科書の意義、主要な機能やその活用例について説明。グループ協議での検討の視点を得るため、小学校・中学校の活用事例の動画を視聴。

【準備物】

- 講義資料
- プロジェクター

詳細は p.19

ワークショップ



グループ協議

グループ

実際にデジタル教科書を操作しながら、活用場面を組み込んだ単元計画を検討。

全体

検討後、代表していくつかのグループが全体に向けて検討内容を発表。

【準備物】

- 操作用端末（受講者持参）
- デジタル教科書
- ワークシート

詳細は p.20

単元全体を通じたデジタル教科書の活用を検討



詳しく
報告書で読む
(p.75～)

レクチャー



80分

有識者の講義

取組のねらい

- デジタル教科書の必要性や効果的な活用方法を理解することができる。

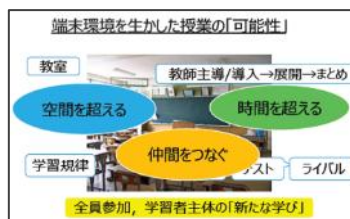
取組内容

■ 前半:「グループ内で現状と課題を共有」

- 校種ごと×地区ごと(同じ教科書発行者ごと)に4～5人のグループを編成。(※次頁のグループ協議も同グループにより実施。)
- 講義の冒頭に、グループ内で、事前に把握したデジタル教科書の活用状況について情報交換する時間を設定。活用による効果や課題を受講者間で共有し、研修を受講するに当たっての各自の課題意識を醸成。

■ 後半:「デジタル教科書の意義や効果的な活用を解説」

- 有識者から、学習者端末等を活用することにより「空間を超える」、「時間を超える」、「仲間をつなぐ」ことが可能となり、全員参加型の学習者主体の新たな学びの実現に繋がることを説明。
- デジタル教科書の主要な機能やそれらの活用方法を紹介した後、小学校・中学校の活用事例の動画(右参照)を視聴。



▲学習者主体の学びの実現に向けた端末活用の必要性を説明



令和3年度
実践事例動画
小学校・外国語編
(リンク)

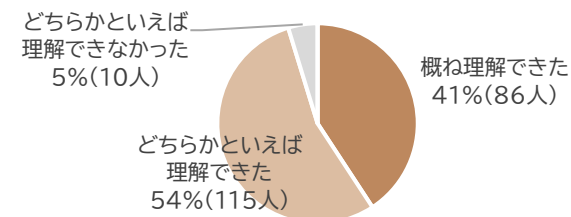


令和3年度
実践事例動画
中学校・外国語編
(リンク)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度 [N=213]



- 本研修の理解度を問う質問では、95%を超える回答者から肯定的な回答を得ていることから、多くの教員がデジタル教科書の必要性や効果的な活用方法を理解することができたと考えられる。

理解した内容(自由記述回答から抜粋)

- グループでの話し合いの中で、他校で実際に活用されている場面や機能を聞くことで新たな視点が得られた。
- デジタル教科書を積極的に活用して、教師が一斉に教える授業から、子供たち自身が学んでいけるような授業へと変えていく必要性を感じた。
- 一人一人に合わせて、発音を確認したり、ルビを振ったり、書き込んだりすることで、学力や定着スピードの差を埋めることに繋がると感じた。



他の教員との情報交換を通じて、活用に関する課題意識を明確化

- 全国的な傾向として、デジタル教科書の活用状況は、地域・学校・教員間で差が広がっている状況にあります。そのため、活用レベルが異なる様々な教員間で、各校の活用実態等について情報交換させることで、他者との比較を通じて自分の立ち位置を自己認識することができます。
- 同時に、「この研修を通じて何を心得るべきか」という課題意識も鮮明にすることができるため、積極的な研修参加の姿勢を引き出すことに繋がります。(放送大学 佐藤 客員教授)

単元全体を通じたデジタル教科書の活用を検討



詳しく
報告書で読む
(p.75~)

ワークショップ



グループ協議

取組のねらい

- デジタル教科書の活用を組み込んだ単元計画を構想することができる。
- デジタル教科書の有用性を実感し、日々の授業における活用の意欲を高めることができる。

取組内容

■ 単元計画の検討

- 各自に端末の持参を依頼し、デジタル教科書の操作環境を確保。
- ワークシート(右図)を用いながら、以下の流れで、グループごとに単元計画を検討。
 - 単元のねらい(子供に身に付けさせたい力)を設定。
 - 各時間でのどのような学習・言語活動を行うかを設定。
 - 単元や授業のねらいの達成に向けたデジタル教科書の活用を検討。
- 検討後、いくつかのグループが全体に向け検討内容を発表。

■ 検討した単元

- 全体発表時に各受講者が内容を想起しやすいよう、各教科書が共通して取り扱う以下の単元を指定し、グループごとに検討。

小学校:「行きたい国の紹介」

中学校:「旅行の企画」

単元のねらい (ゴールの壁)			
※単元全体を通して、児童生徒にどのような力を身に付けさせたいかを記入する。			
①単元のねらいに児童生徒がどのような力を身に付けたいかを設定し、ゴールを設定する。			
②ゴールに向けて、どのような学習・言語活動を行うかを設定し、バックワードデザインで単元計画を考える。			
③学習活動に、デジタル教科書の活用をどのように行うかを設定し、授業計画に記入する。			
単元	ねらい	学習活動	デジタル教科書の活用
①	単元のねらい(子供に身に付けさせたい力)を設定する。	単元のねらいに児童生徒がどのような力を身に付けたいかを設定し、ゴールを設定する。	単元や授業のねらいを達成するための学習・言語活動を設定し、デジタル教科書の活用を検討する。
②	各時間でのどのような学習・言語活動を行うかを設定する。	各時間でのどのような学習・言語活動を行うかを設定する。	各時間でのどのような学習・言語活動を行うかを設定する。
③	単元や授業のねらいの達成に向けたデジタル教科書の活用を検討する。	単元や授業のねらいの達成に向けたデジタル教科書の活用を検討する。	単元や授業のねらいの達成に向けたデジタル教科書の活用を検討する。

▲実際に用いたワークシート(一部抜粋)

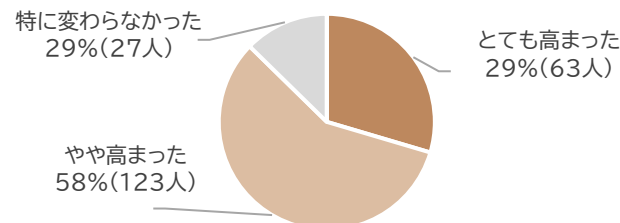


▲デジタル教科書の機能を確認し、ねらいの達成に向けた活用を検討

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

活用に対する意欲の変化 [N=213]



- 活用に対する意欲の変化を問う質問では、**87%の回答者が現状より高まったと回答**。実際にデジタル教科書を操作しながら単元計画を検討したことで、各自の授業における活用イメージを具体化し、意欲を高めることに繋がったと考えられる。

今後の取組 (自由記述回答から抜粋)

- 子供たちの中で理解・習熟に差が生まれそうなところでデジタル教科書を積極的に活用し、個々に合ったやり方で学習を進められるようにしたい。
- デジタル教科書は特に個別最適な学びに繋がる最適な教材だと思う。デジタル教科書を使用して子供の理解に合わせた課題を出せるようにしていきたい。



デジタル教科書を用いた協議で、単元を通じた活用イメージを具体化

- 教員の中には、デジタル教科書を活用した授業経験がない者や、触れる機会が少ない者もいます。実際の授業での活用場面をイメージするためには、まずはデジタル教科書に触れ、機能や操作感を確かめる機会を設けることが重要です。
- また、単位時間でなく単元を通じた検討とすることで、各時間のねらいの達成に向けた様々な活用のアイデアの創出が期待できます。(富山県教育委員会 往蔵 指導主事)

特定の教科・授業に焦点化し、指導助言のポイントを検討



詳しく
報告書で読む
(p.91～)

研修前



- 多くの指導主事は、デジタル教科書の活用経験が無く、学校訪問で先進的な授業に触れる機会も少ないため、活用に関する指導イメージを持てていなかった。



- 研修において、特定の授業場面を想定しながら検討を行ったことで、指導イメージを具体化することができた。
- 7割を超える指導主事が、デジタル教科書活用に関する指導助言の自信をもつことができた。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ デジタル教科書に触れたことが無い指導主事も多いため、実際に操作しながら、特定の活用場面を想定して検討することで、指導助言のイメージを具体化する。
- ✓ 全体発表の時間を十分に設けて教科・校種を越えた活用・指導のポイントを受講者間で共有することで、グループ協議で獲得した指導イメージをさらに補強する。

対象者	教員	—
	指導主事	県・教育事務所 指導主事 55名
実施方式	参集	オンライン
	ハイブリッド	

研修の流れ

レクチャー



40分

有識者の講義

全体

- 学習者の実際の声に着目しながら先進事例の動画を視聴。動画の感想をグループや全体で共有し、デジタル教科書の活用の意義を説明。具体的な指導イメージの獲得に向け、現場の教員が抱える実際の課題や授業づくりのフェーズごとに指導助言のポイントを解説。

詳細は p.22

【準備物】

- 講義資料
- 先進事例の動画
- プロジェクター

ワークショップ



90分

グループ協議

グループ

- 「国語、算数・数学、外国語」×「小学校、中学校」の6グループに分かれて、デジタル教科書の活用及び指導助言のポイントについて検討。
各グループに3台の端末を用意し、デジタル教科書に実際に触れながら検討ができる環境を整備。また検討する題材は、操作することができるデジタル教科書(サンプル版)で取り扱う授業に設定。

詳細は p.23

【準備物】

- デジタル教科書(サンプル版)
- 操作端末
- 模造紙、付箋、ペン

リフレクション



40分

全体発表

全体

- グループ協議で検討したポイントについて、1グループ当たり5分程度で全体に共有し、教科・校種を越えた活用・指導のポイントに関する理解の促進を図る。

詳細は p.24

【準備物】

- 各グループで作成した模造紙
- プロジェクター

特定の教科・授業に焦点化し、指導助言のポイントを検討



詳しく
報告書で読む
(p.91～)

レクチャー



40分

有識者の講義

取組のねらい

- デジタル教科書の意義や指導助言に必要な視点を理解することができる。

取組内容

取組結果

■ 前半:「デジタル教科書の意義」

- 実際の授業におけるデジタル教科書の活用の様子を掴むため、講義冒頭で**先進事例の動画**を視聴。その際に、活用方法だけでなく動画内で取り上げられている「学習者の声」に着目することもアナウンス。
- 視聴後、グループ及び全体で感想を共有し、デジタル教科書活用による効果や必要性に関する共通認識を醸成。

■ 後半:「指導助言に必要な視点の獲得」

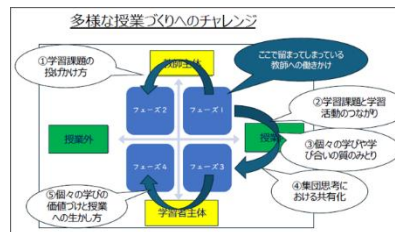
- 「活用事例の不足」「子供が授業に集中できないことへの懸念」など教員が実際に抱える課題を紹介し、実態に即した対応が必要であることを説明。デジタル教科書等を活用した授業づくりについて、「教員・学習者主体」×「授業内・外」の軸でフェーズを分け、段階ごとに必要となる指導助言のポイントを解説。

“授業づくり”のフェーズごとに
指導助言のポイントを解説



令和5年度
実践事例動画
(リンク)

令和6年度
実践事例動画
(リンク)



■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度 [N=34]

どちらかといえば
理解できた
14%(3人)

概ね理解できた
86%(31人)

- 本研修の理解度を問う質問では、回答した**全ての受講者**から肯定的な回答を得ており、**デジタル教科書の意義や指導助言時に必要な視点を理解した**と考えられる。

理解した内容(自由記述回答から抜粋)

- 講義で視聴した動画が衝撃的であり、「こんな学習者を育てたい」と思えるような内容であった。
- 動画に登場する子供の『紙よりデジタルの方が経験が積み重なる』という感覚は自分と反対であった。デジタルネイティブな子供たちにあわせて授業づくりをしていく必要があると感じた。
- 「多様な授業づくりのチャレンジ」の説明を受け、それぞれのフェーズごとに必要となる視点を理解することができた。指導助言に活かしていきたい。



学習者の声を引用し、「デジタル教科書の意義」を訴求

- 教員・指導主事ともに、デジタル教科書活用の効果や必要性を実感していないことが多いです。そこで、先進事例を紹介する際に、**実際にデジタル教科書を活用する「学習者の声」**に着目させると、活用の効果や必要性を納得感をもって理解させることができます。また、授業動画や公開授業は、実際の授業における学習者・教員の活用の様子を詳細に示すことができるため、各自のイメージをより具体化したい場合に効果的です。(放送大学 佐藤 客員教授)

特定の教科・授業に焦点化し、指導助言のポイントを検討



詳しく
報告書で読む
(p.91～)

ワークショップ



90分

グループ協議

取組のねらい

- デジタル教科書を活用した授業づくりに関する具体的なイメージを持ち、自信をもって指導助言ができる。

取組内容

■ グループ協議の実施方法

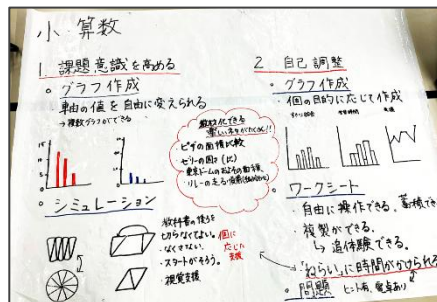
- 教科(国語・算数・数学・外国語)×校種(小、中学校)の6グループを編成。1グループの人数は6～7人程度。
- 各グループに3台の端末を用意し、デジタル教科書(サンプル版)を操作できる環境を準備。
- デジタル教科書(サンプル版)で扱っている授業場面をもとに、以下の協議の＜視点＞に沿ってグループごとに検討



▲島型の配席で議論を活性化

■ 協議の＜視点＞

- 富山県教育ビジョンで掲げる以下の(1)(2)を視点に設定。
 - (1) 子供の問題(課題)意識を高める。
 - (2) 子供が自己調整しながら学習を進められるようにする。
- これらに沿いながら効果的な活用を模索するとともに、どのような指導助言ができるかを検討。

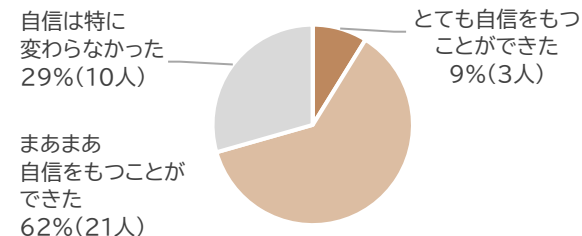


▲協議の＜視点＞に沿って模造紙にポイントを整理

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

自信の獲得 [N=34]



- 本研修を通じた自信の変化を問う質問では、回答した受講者の7割以上が現状より高まったと回答しており、グループ協議により、実際の指導助言のイメージを具体化したことが自信の獲得に繋がったと考えられる。

理解した内容・今後の取組(自由記述回答から抜粋)

- デジタル教科書を操作しながら、特定の授業を題材として協議をしたことで、授業でどのように活用できるか、また、何に留意すべきかを具体的に考えることができた。
- 「授業のねらいと一致しているか」、「(見映えではなく)子供の制作物の内容をしっかりと捉えて評価や指導ができているか」など、デジタル教科書等を活用したことによる効果に注目しながら今後の助言を行いたい。



ポイント解説

特定の教科や授業に焦点化し、具体的な活用場面を議論

- 本研修はより具体的な活用を受講者間で議論するために、教科や単元、題材等を指定することで、「この授業ならどのようにデジタル教科書を使うか」という実際の活用を想定した議論を進め、「意識・行動等の変容」にまで繋げることができました。このように教科・授業を絞るなど、検討の「前提」を焦点化し、具体的な場面を想定しながら検討する形とすることで、議論を活性化し、高い理解度を引き出すことが期待できます。(富山県教育委員会 浦島 指導主事)

特定の教科・授業に焦点化し、指導助言のポイントを検討



詳しく
報告書で読む
(p.91～)

リフレクション



40分

全体発表

取組のねらい

- 教科・校種を越えた知見共有を経て、活用・指導助言のポイントに関する理解をさらに深めることができる。

取組内容

取組結果

■ 全体発表の主な流れ

- 1グループ当たり5分程度の発表時間を設け、検討した活用方法及び指導助言のポイントを全体に発表。発表に当たっては、協議の＜視点＞に沿って活用及び指導助言のポイントを説明することとした。



▲小学校・国語のグループの発表

デジタル教科書により、叙述の抜き出し・並べ替えが容易になり、考えを整理する際に有用であることを説明。また、留意点として、整理した考えの見栄えでなく、内容をしっかり見取る必要があることを全体に共有。



▲中学校・数学のグループの発表

デジタル教科書を使うことで、動点の位置で面積が変わる様子を視覚的に捉えられることを説明。その上で、理解した内容を、子供たちなりの言葉で再度アウトプットさせることが重要と全体に共有。



ポイント解説

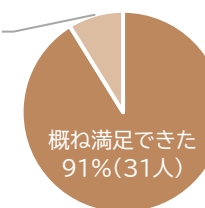
グループごとの検討結果を全体化し、各受講者の理解を補強

- グループでの検討に閉じず、教科・校種ごとの活用や指導助言のポイントを広く全体に共有することで、教科ごとの共通点・差異が見いだされ、各受講者の理解をさらに深めることができました。また、シェアリングの時間を十分に確保したことで、模造紙に整理したポイントに加えて、デジタル教科書の機能を紹介したり、子供の学習の場面を模擬的に示したりするなど、受講者の理解を深める創意工夫を凝らした発表を引き出せました。(富山県教育委員会 浦島 指導主事)

■ 受講者アンケートの結果

研修の満足度 [N=34]

どちらかといえば
満足できた
9%(3人)



- 本研修の満足度を問う質問では、回答した**全ての受講者から肯定的な回答を得られた**。グループ協議によりイメージを具体化した上で、他教科・他校種の成果共有を行ったことで**理解がさらに深まり**、高い満足度を引き出したと考えられる。

理解した内容（自由記述回答から抜粋）

- 各教科によって活用できる場面が違い、様々な活用の可能性がある**と理解することができた**。
- 国語、算数・数学、外国語のそれぞれのデジタル教科書の機能や活用に関する指導助言について、**共通点や差異を理解することができた**。
- 各グループの検討結果を全体共有することで、デジタル教科書ならではの操作性や魅力を知ることができた。さらに知見を深めたい。

全県向けのオンライン研修で、デジタル教科書の活用を周知



詳しく
報告書で読む
(p.106～)

研修前



- 多くの教員は、未だデジタル教科書の効果や意義を実感していないため、活用が進んでいない。
- デジタル教科書活用のノウハウが一部の教員に属人化しており、広がっていない。



- ほぼ全ての受講者が研修に満足しており、デジタル教科書の意義等について理解を促すことができた。
- 多くの受講者が研修内容を各自の学校で横展開することができ、研修で得られた学びが県内に広がった。

研修後



研修の概要

基本情報



- 研修のねらい
- 毎年夏休みに実施している、全ての小・中学校の代表者を対象とした研修で、デジタル教科書に関する講義・協議を実施。
 - オンライン研修でも効果的なグループ協議がなされるよう、議論の活性化に向けた工夫を講じ、学校を越えたデジタル教科書活用のノウハウの共有に繋げる。

対象者	教員	小・中学校教員(各校代表者) 168名
	指導主事	県・市町村教育委員会 指導主事 69名
実施方式	参集	
	オンライン	
	ハイブリッド	

研修の流れ

研修前の取組

レクチャー



有識者の講義

ワークショップ



グループ協議

研修後の取組

- 個別
- 事前アンケートで、受講者の属性(役職・担当教科)やデジタル教科書に関する課題を調査。
- 個別
- 事前課題として、[県内の先進事例の動画](#)視聴を課す。

- 全体
- デジタル教科書の意義を理解した上でグループ協議が行えるよう、有識者から講義。授業観の転換の必要性やデジタル教科書の主な機能や活用の意義、活用例を説明する。その後、事前課題で視聴した動画について、効果的な活用のポイントを解説。

【準備物】

- 講義資料

➡ 詳細は p.26

- グループ
- 6～7人のグループに分かれ、2つのテーマで意見交換。グループ別にオンライン会議ルームを割り振る。また、コラボレーションツールを用いて、個々の考えを付箋に書いて共有する。

- 全体
- 2つのテーマのそれぞれの終わりでは、全体の会議ルームに戻り、有識者からフィードバック。

【準備物】

- オンライン会議リンク(グループ別の会議ルーム含)
- コラボレーションツール

➡ 詳細は p.27

- 個別
- 研修内容を受講者の学校で展開するよう促し、研修2か月後の追跡アンケートで状況を確認。資料の配付は必須とし、展開の方法(職員会議での共有、校内研修でのレクチャー等)は任意とする。

全県向けのオンライン研修で、デジタル教科書の活用を周知

詳しく
報告書で読む
(p.106～)

レクチャー



70分

有識者の講義

取組のねらい

- 有識者の講義を通して、授業観の転換の必要性やデジタル教科書の活用の意義、活用時のポイントを理解する。

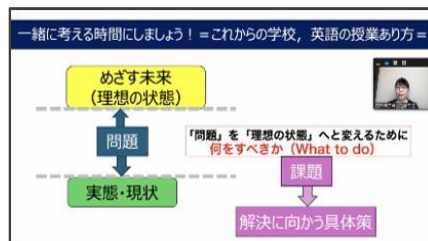
取組内容

■ 前半: デジタル教科書の意義等、「理論」の解説

- 有識者より、講義資料を用いて、これからの時代に求められる授業の在り方や授業観の転換の必要性を説明。
- その後、デジタル教科書の主要な機能やその活用例を説明。

■ 後半: 活用方法等、「事例」の解説

- 事前課題で受講者が視聴した県内の先進事例の動画をもとに、効果的なデジタル教科書の活用のポイントや学習支援ソフトとの併用について、講師から説明。
- 本動画の事例を目指すべき授業の一例として示し、具体的な活用方法をイメージさせることで、グループ協議の議論の呼び水に。



▲講義冒頭に授業の在り方を問題提起

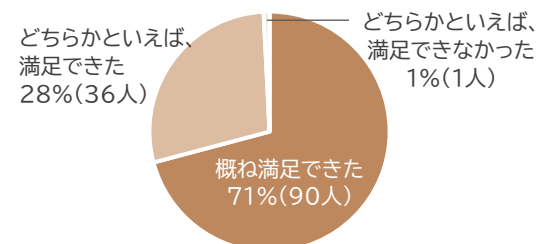


▲動画の場面別に、活用ポイントを記載し解説

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修の満足度 [N=127]



- 県内多くの小・中学校から代表者が参加する大規模研修であったが、満足度についてほぼ全回答者から肯定的な回答が得られた。「理論」と「事例」の両面からの講義が、受講者のニーズに応えたものであったと考えられる。

満足した内容 (自由記述回答から抜粋)

- 教師自身の既成概念を打ち破る刺激的な講義だった。今後の学校経営の参考になった。
- デジタル教科書でできること・活用の仕方・教師の関わり大切さなどについて分かり満足した。
- 事前課題の動画の中から、注目すべきポイントに沿って講義で解説され、講師の考えも示していただけだったので良かった。



ポイント解説

目指すべき先進事例を示し、「理論」と「事例」の両面から理解を促進

- 本研修のように属性や担当教科、デジタル教科書の活用状況が様々な受講者が混在する場合、「理論」と「事例」の両方の観点からバランスよく解説することで、それぞれの受講者の理解を促すことができます。
- また、研修前の動画視聴により活用イメージを醸成した後、講義でそのポイントを詳細に解説することで、受講者の理解をさらに深めることができます。また、視聴した動画を以降の協議の題材とすることで、議論の活性化も期待できます。(放送大学 佐藤 客員教授)

全県向けのオンライン研修で、デジタル教科書の活用を周知



詳しく
報告書で読む
(p.106～)

ワークショップ



40分

グループ協議

取組のねらい

- 講義で学んだ内容を踏まえ、受講者同士の意見交換を通して、デジタル教科書の活用方法や授業改善のステップを具体化する。その上で、受講者自身の学校での横展開に繋げる。

取組内容

■ グループ協議の進め方

- 6～7人のグループに分かれ、グループ別にオンライン会議ルームを割り振る。
- 各グループにはファシリテーター役の指導主事を配置。
- コラボレーションツールを用いて、個々の考えを付箋に記入し、グループで共有する。
- 各テーマの後に、研修全体の会議ルームで有識者からフィードバックを行う。

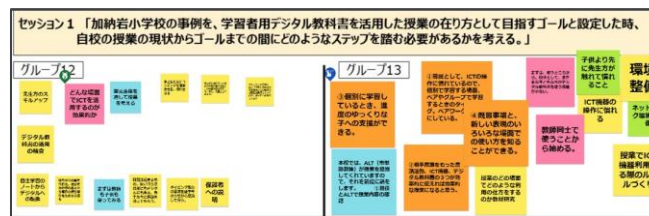
■ グループ協議のテーマ

- 以下のテーマでグループごとに意見交換。考えやノウハウを共有し、各受講者の研修内容の横展開に繋げる。
 - デジタル教科書等を活用し、どのような授業改善のステップを踏む必要があるか
 - デジタル教科書や学習支援ソフトをどのように活用すべきか



グループ別の
会議ルーム

コラボレーション
ツールを使い
個々の考えを
可視化・共有



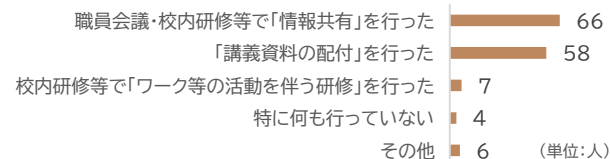
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

満足した内容（自由記述回答から抜粋）

- 提示された事例と本校の実態を比較したり、他校と情報共有をすることで、どのような実践を積み重ねていくことが必要なのかを知る機会となり満足した。
- 管理職の先生の話や他の学校の活用ステップの話聞いたのが満足できた。
- 自分のグループの意見や実践だけでなく、(コラボレーションツールで)他のグループの付箋も見れてよかった。
- ファシリテーターの指導主事に上手に進めていただいた。

研修内容の校内での展開の実施状況 [N=117]



- 研修2か月後の追跡アンケートでは、情報共有・講義資料の配付を中心に、**多くの受講者が研修内容を各学校で展開できた**ことが分かった。本研修が県内全域でのデジタル教科書活用の周知に繋がったと示唆される。



ポイント解説

議論の可視化とファシリテーターの配置で、オンラインの協議を円滑化

- グループ内で受講者の役職や活用状況は様々なため、議論をリードする指導主事を各グループに配置しました。また、オンライン上で共同編集できるコラボレーションツールも使用し、各受講者の意見を可視化できるようにしました。このような工夫を講じることで、議論の停滞を回避し、多様な視点からの意見交換を実現できます。(山梨県教育庁 古屋 指導主事)

県内の先進事例から、活用のポイントや経緯を学ぶ



詳しく
報告書で読む
(p.122～)

研修前



- デジタル教科書の先進事例は創出できているが、県内に展開できていない。
- 教員・指導主事共に、デジタル教科書を効果的に活用した授業の具体イメージを描けていない者が多い。



- 後日のアーカイブ配信も含むハイブリッド形式で、教員・指導主事の双方に先進的な事例を共有できた。
- 様々な教科に共通する活用のポイントと、試行錯誤の過程を示したことで、大半の受講者が確かな理解を得た。

研修後



研修の概要

基本情報



- 県内で先進的な実証を行った3校の発表と有識者からの価値付けを通して、「事例を知りたい」という現場からの声に応える。
- その上で、様々な教科に共通する一般化された活用ポイントや、実践の試行錯誤の過程を示し、教員・指導主事の各視点で活用促進に向けて理解を促す。

対象者

教員 小・中学校教員 77名
指導主事 県内の指導主事 98名

実施方式

参集

オンライン

ハイブリッド

研修の流れ

研修前の取組

レクチャー



実践発表

レクチャー



パネルディスカッション

研修後の取組

個別

- 研修事例4-1の追跡アンケートで、受講者のニーズを調査。パネルテーマに反映する。
- レクチャー中心の研修のため、受講者には、デジタル教科書の活用状況や課題を事前に考えてくようアナウンス。

全体

- 令和5年度・6年度にデジタル教科書を活用した実証に取り組んだ山梨県内の小学校3校(外国語2校・算数1校)から、各校の実践例の発表を行う。
- 各校の発表時に、有識者とのインタラクティブな質疑応答の時間を設け、実践例の深掘りをする。

【準備物】

- 各校の実践発表資料

詳細は p.29

全体

- 冒頭に有識者から、実践発表を踏まえてデジタル教科書の活用と教師の役割に関するミニ講義を実施。
- 3つのテーマに沿って、3校の授業者と有識者でパネルディスカッション。実践における試行錯誤や教師の働きかけの工夫等をそれぞれ回答。
- 各校の具体的な回答から、各教科に共通する一般化したポイントや教師の指導の工夫等を、有識者から価値付けする。

【準備物】

- 有識者のパネルディスカッション資料

詳細は p.30

個別

- 研修内容を受講者の学校や地域内で展開するよう促し、研修2か月後の追跡アンケートで状況を確認。展開の方法(アーカイブ配信の視聴を促す、職員会議で資料を共有、等)は任意とする。

県内の先進事例から、活用のポイントや経緯を学ぶ



詳しく
報告書で読む
(p.122~)

レクチャー



60分

実践発表

取組のねらい

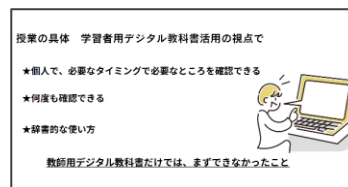
- 県内の先進校の実践発表を行い、デジタル教科書を効果的に活用した具体的な授業イメージを知る。

取組内容

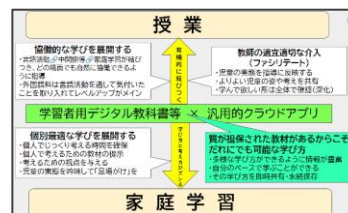
取組結果

■ 実践発表の進め方

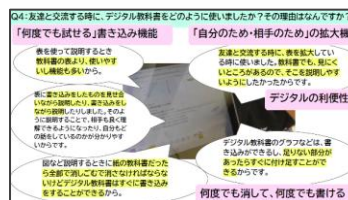
- 令和5年度・6年度にデジタル教科書を活用した実証に取り組んだ県内の小学校3校から、各校の実践例(詳細は以下リンク参照)を発表。
 - 令和5年度 [山梨市立加納岩小学校\(外国語\)](#)
 - 令和6年度 [甲州市立塩山北小学校\(外国語\)](#)
 - 令和6年度 [甲州市立塩山南小学校\(算数\)](#)
- 各校の発表中に、有識者から質問を投げかけ、実践例を深掘りする。
- 本研修は参集・オンライン・後日アーカイブ配信のハイブリッド形式で実施。登壇者(3校の授業者・有識者)は大型プロジェクターを用いて発表し、オンラインではスライド内容及び発言者のアップを映す。



▲加納岩小の資料(抜粋)
学習者用デジタル教科書ならではの取組を説明



▲塩山北小の資料(抜粋)
家庭学習と授業の往還を説明



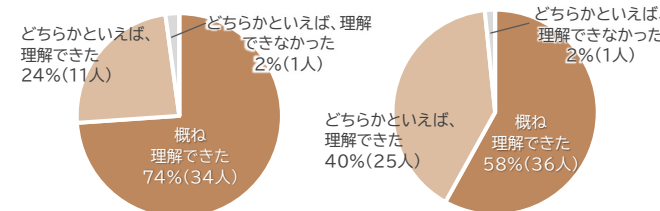
▲塩山南小の資料(抜粋)
児童の声を引用して説明

■ 受講者アンケートの結果

研修の理解度

指導主事[N=46]

教員[N=62]



- 本研修は、指導主事・教員の双方をターゲットにした研修であったが、研修内容の理解度についてはいずれも高い結果となった。
- 指導主事からは「授業観の転換の必要性」や「デジタル教科書活用の意義」が理解できたと回答する声が多く、一般化された今後の指導助言の方向性を獲得できたと示唆される。
- 一方、教員は「算数科や家庭学習での活用方法」や「デジタル教科書と学習支援ソフトの併用」など、具体的な活用方法を理解したと回答する声が多く見られた。
- 指導主事・教員では、それぞれ異なるポイントに訴求したことがアンケートから読み取れた。



具体的な実践例に加え、デジタル教科書の活用ポイントを一般化して紹介

- 各受講者が、具体的な事例を応用して自身の実践に繋げていくためには、各事例から抽出され他教科にも応用できる「一般化したポイント」を示すことが重要です。
- 各校の具体的な取組は、授業者からの発表や資料の中で説明し、有識者と授業者のインタラクティブなやり取りでは、教師のねらい等の深掘りや、他の授業にも通じるよう、デジタル教科書の活用のポイントを一般化しての価値付けを意識的に行いました。このように事例紹介では、具体例と組み合わせることで一般化することが有効です。(放送大学 佐藤 客員教授)



レクチャー



50分

パネル
ディスカッション

取組のねらい

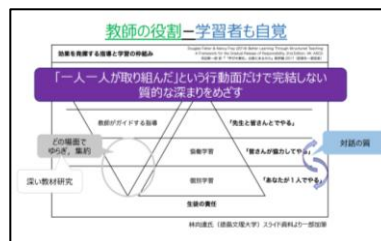
- 成果に加え、実践に至るまでの過程の試行錯誤や、学習者自身で学びを進めるための教師の働きかけ等の工夫を伝え、受講者の共感を生む。

取組内容

■ パネルディスカッションの流れ

- 実践発表を踏まえて、はじめに有識者からデジタル教科書の活用と教師の役割に関する5分程度のミニ講義を実施。
- 研修事例4-1の追跡アンケートで得られた教員のニーズを踏まえ、以下3つのテーマを設定。
 - 発表した実践に至るまでにどのようなことをしてきたか
 - 協働的に学ぶ場面での先生のファシリテートで大事なことはなにか
 - 活用の次のステップアップに向けた意気込み
- 各テーマについて、有識者から3校の授業者に順番に質問を投げかけ、やり取りを行った。
- 授業者からは、実践に至るまで「粘り強く試行錯誤すること」の重要性や、学習者主体の学びに向けて行った「教師の働きかけ」の例を回答。

パネルディスカッションの様子。テーマはプロジェクターに投影。▶



▲ミニ講義では、教師と学習の役割の変化を、参考資料を引用しながら解説。



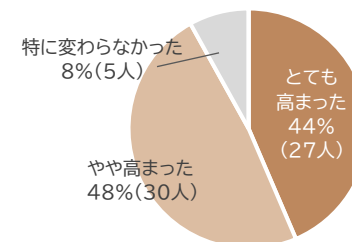
取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した点（教員の自由記述回答から抜粋）

- 実践例を知ること、児童の実態に沿った具体的な取組と苦悩を知ることができたので満足した。
- 実際に行っている取組だけでなく、実践する際の注意点や、より効果的に利用するために心掛けていることなども聞けて今後に活かせる内容であった。

受講者（教員）の意欲[N=62]



- ▶ 本研修は受講者が検討・協議する活動はなかったが、実践発表やパネルのレクチャーにより、約9割がデジタル教科書活用の意欲が現状より高まったと回答。
- ▶ 「まずは子供たちと試行錯誤しながら活用する」といった声も多く挙げられ、本研修で示した実践例やその過程が、受講者の意欲向上に繋がっていると示唆された。



ポイント解説

実践の成果だけでなく、そこに至るまでの過程を共有

- 単に理想形として実践事例を紹介するのみでは、自分事として捉えられず、真似して取り組もうという意欲を持ってない教員も多いです。そのため、本研修では、事例紹介に加えて取組の背景や実践までの過程にもフォーカスしました。実践の成果だけでなく、実践までの躓きやそれを克服した方法等の試行錯誤の過程が参加者の共感を生み、納得感に繋がっていったと思います。
- 本研修は、アーカイブ配信で後日でも見られるようにし、県内の小・中学校の代表者宛に、視聴や校内での横展開を呼びかけました。このような働きかけにより、さらに多くの教員に県内の先進事例を展開し、効果的な活用を広げることができています。（山梨県教育庁 古屋 指導主事）

受講者の実践に向け、公開授業で活用イメージを醸成



詳しく
報告書で読む
(p.145～)

研修前



- 多くの教員が、デジタル教科書を活用した授業のイメージをもつことができていなかった。
- そのため、受講者の約半数は未だ活用に着手できずにおり、活用している者も、週の半分以下の使用頻度に留まっていた。



- 受講者の3/4が授業でデジタル教科書を活用するようになり、頻度が高い者(週の半分以上で使用)も見られ始めた。
- 公開授業を通して、授業内でデジタル教科書を使うイメージや自身の実践へのヒントを得ることができた。

研修後



研修の概要

基本情報



- 年2回の参集と受講者自身の授業実践を伴う研修として実施。実践に向け、まずは公開授業を通して活用方法のイメージを掴む。
- 公開授業に加え、受講者同士の意見交換や有識者の講義を通して、デジタル教科書を活用した授業改善によって目指す姿を具体化する。

対象者	教員	中学校外国語科教員56名
	指導主事	—
実施方式	参集	オンライン
	ハイブリッド	

研修の流れ

研修前の取組

レクチャー

公開授業



ワークショップ

グループ協議



レクチャー

有識者の講義



研修後の取組

個別

- 事前アンケートにより、デジタル教科書の活用頻度等の受講者の現状を把握する。

全体

- 公開授業を参観。
本研修を通して意識する<視点>を示したワークシートを配布し、参観中に気付きを記入。
- 授業では、デジタル教科書の「音声再生機能」や付箋等の「書き込み機能」を活用し、学習方法を子供に選ばせる取組を行った。

【準備物】

- 公開授業の指導案
- ワークシート

➡ 詳細は p.32

グループ

- 6～7人のグループに分かれ、公開授業を呼び水に受講者同士で意見交換。
- ワークシートのメモをもとに、観察結果や気付きを共有し、受講者自身の普段の取組を振り返り。

➡ 詳細は p.33

全体

- 有識者から、「公開授業の振り返り」、「言語活動の定義」、「デジタル教科書の活用の在り方」、「指導法の改善」の4つのテーマで講義。
- 「授業観の転換」を軸にしたデジタル教科書の活用について、理解を深める。

【準備物】

- 講義資料

個別

- 第2回研修に向けて、各受講者が授業計画書や授業動画を作成。
デジタル教科書の活用方法について、県教委より参考資料を作成して配布。

受講者の実践に向け、公開授業で活用イメージを醸成



詳しく
報告書で読む
(p.145～)

レクチャー



公開授業

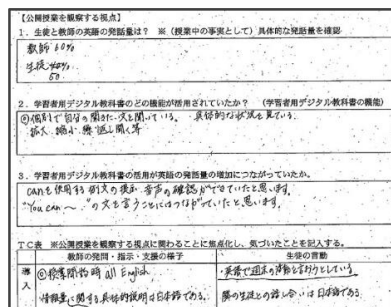
取組のねらい

- ・ 公開授業を通して、デジタル教科書の活用が効果的な場面や子供たちの活用の様子など、具体的な活用イメージを掴む。

取組内容

■ 本研修で意識する＜視点＞

- ・公開授業の観察観点やグループ協議の論点として、研修全体を通して意識する3つの＜視点＞を設定。
1. 生徒と教員の英語の発話量
 2. 学習者用デジタル教科書の機能
 3. 学習者用デジタル教科書の活用と英語の発話量の関係
- ・＜視点＞ごとに枠を設け、気付きをメモするワークシートを配布し、受講者の理解を焦点化する。



▲ワークシートへの書き込み例

■ 公開授業の内容

- ・「個別最適な学び」と「学級全体での共有」にデジタル教科書等を活用した公開授業を実施。デジタル教科書の活用方法は生徒自身に選択させ、各自で「音声再生機能」を用いて音読を行わせたり、「書き込み機能」を用いて付箋に生徒の考えを記入させたりする。
- ・デジタル教科書の様々な機能を授業に取り入れ、活用が効果的な場面を例示。

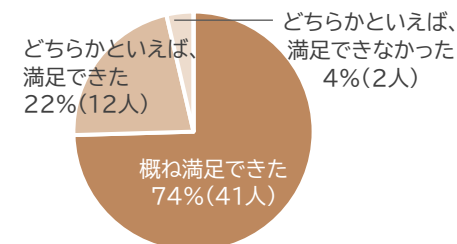


▲公開授業を参観する様子

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修の満足度 [N=55]



- 研修の満足度に対し、大半の受講者が理由で「公開授業」に言及していた。公開授業形式で実際の活用の様子を示したことが、受講者の満足度に繋がっていた。

満足した内容(自由記述から抜粋)

- ・ 生徒が自分なりにデジタル教科書を工夫して使っている姿を見ることができ、自分の今後の授業づくりの参考になった。
- ・ 公開授業が普段から取り組めるような内容で大変参考になった。
- ・ 授業を観察する＜視点＞が明確だったので、その後のグループ協議も意見交流がしやすかった。



実際の活用場面を示し、受講者の活用イメージを醸成

- ・デジタル教科書の活用に未だ踏み出せていない受講者にとっては、公開授業で実際の活用場面を参観することで、自分自身の実践に繋がるヒントを得ることができます。
- ・公開授業後のグループ協議や有識者からの講義、研修後の受講者の取組まで、一貫して＜視点＞を軸に構成されています。各活動に繋がりをもたせることで、受講者の理解を焦点化し深めることが期待できます。(東京学芸大学 齋藤 教授)

受講者の実践に向け、公開授業で活用イメージを醸成



詳しく
報告書で読む
(p.145～)

ワークショップ



20分

グループ協議

取組のねらい

- 受講者同士の意見交換を通して、デジタル教科書を活用した授業改善によって目指す姿を具体化する。
その上で、受講者自身の授業実践に繋げる。

取組内容

■ グループ協議の流れと他活動との繋がり

- 座席の近い者同士で6～7人で1グループを作り、意見交換を実施。
- はじめに、公開授業のワークシートのメモをもとに、観察結果や気づきを共有。
その後、受講者自身の活用状況や悩みを出し合い、互いにアドバイスをし合う。
- その後の有識者の講義では、グループ協議で挙げられていた受講者の声も踏まえながら、デジタル教科書の活用や指導法の改善によって目指す授業の在り方を解説。



▲グループで交流する様子

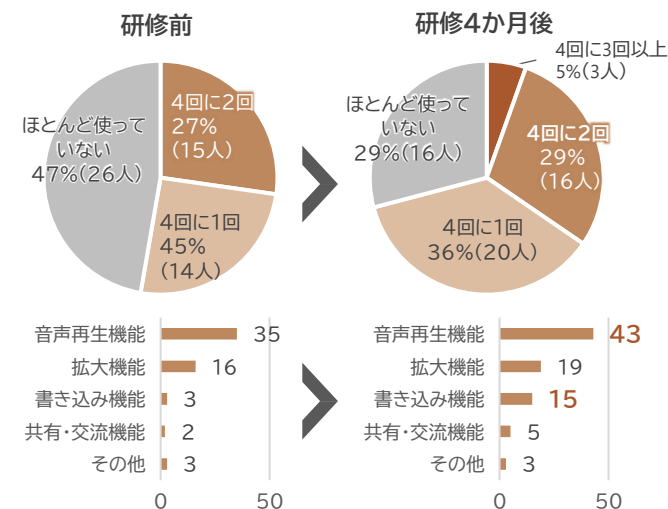
	活用する機能	イメージ	具体例
1	音声読み上げ	生徒が自分のペースで、語彙や表現を確認したり学習したりすることで、語彙や表現への理解が進む。	生徒が新出表現「I think that～」の発音を正確に発音できるまで繰り返し発音練習する。練習した結果、英語での意見文のやり取りの際、「I think that～」を使って 考えを表現 した。
2	拡大機能	学習者用デジタル教科書の写真やイラストを活用して、考えや気持ちを伝え合うことができる。	あるテーマに関する国ごとのデータを示すグラフを拡大して示すことで、比較する数値が見やすくなり、数値の説明を より具体的に 行った。
3	書き込み機能	より分かりやすく伝えるための表現を教科書本文から抜き出して線を引くことで、考えを深めることができる。	生徒が「How do you say ～ in English?」や「What do you mean?」に線を引いた。家庭学習で線を引いた部分について復習をし、次の日の授業、導入のALTとのSmall Talkでその表現を活用した。
4	書き込み機能	色を変えて書き込んだ他者の意見を踏まえて、改めて自分の意見を整理することで、考えを深めることができる。	ペアの相手に「Will AI make our lives better?」とインタビューをする。学習者用デジタル教科書に自分とは違う意見をメモし、そのメモをもとに 自分の意見文を再構築 し、次のやり取りで活用した。
5	共有・交流機能(メモの履歴の活用)	学習者用デジタル教科書に書き込んだメモの履歴を使って考えや意見の交流を行うことができる。	相手が メモを活用して発話 した内容を開いて、聞いた内容について レポート活動 を行った。 〔「聞くこと」と「話すこと(発表)」の領域統合〕

▲県教委が作成・配布した参考資料

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修以降のデジタル教科書の活用頻度 [N=55]



- 本研修と研修後に受講者自身で実践する取組により、デジタル教科書の活用頻度が高まり、70%以上が週4回に1回以上活用し、3回以上活用する者も見られた。
- 特に、本研修の公開授業で紹介され、受講者同士で議論した「音声再生機能」、「書き込み機能」の活用が大幅に伸びており、受講者の行動変容に繋がった。



ポイント解説

受講者の実践に向け 研修後もフォローに取り組み、 活用方法の理解を促進

- 受講者自身の状況をグループ協議で振り返り、意見交換することで、今後の実践に向けた各々の課題や授業改善の目標を明らかにすることができます。
- さらに、受講者自身でも実践に取り組むことができるよう、研修後もフォローを実施することが有効です。
例えば、本研修では受講後アンケートの声を踏まえ、**デジタル教科書の機能と機能別の具体的な活用例**について、参考資料(右図)を作成・配布しました。
このようなフォローを行うことで、多くの受講者が活用しに踏み出し、これまで活用できていなかった機能の活用にも挑戦するなど、行動の変化に繋がりました。(福岡県教育庁 田中 指導主事)

受講者自身の実践の動画を持ち寄り、意見交換



詳しく
報告書で読む
(p.157～)

研修前



- 受講者は、第1回研修を通して、デジタル教科書を活用した授業のイメージや自身の授業実践へのヒントを得られた。
- その後、受講者には、**各自の学級の状況に応じて、デジタル教科書を用いた授業改善に取り組むことを求めた。**



- 研修の一環として授業実践を促し、**受講者の約9割がデジタル教科書を活用し、様々な機能の活用頻度が高まった。**
- 授業動画を活用した意見交換を通して、他の教員の事例からヒントを得て、さらなる授業改善に繋げる様子が見られた。

研修後



研修の概要

基本情報



- ✓ 授業動画と計画書を事前に作成させることで、第1回研修で獲得したデジタル教科書を活用した授業のイメージを、各受講者が**自身の具体的な授業実践に繋げる。**
- ✓ 各受講者の授業実践に関して、指導主事を交えたグループで協議を行うことで、**自身の授業の課題やその解消に向けた視点を得る。**

対象者	教員	中学校外国語科教員56名
	指導主事	—
実施方式	参集	オンライン
	ハイブリッド	

研修の流れ

研修前の取組

個別

- 第1回研修の内容を踏まえて、デジタル教科書の活用を含めた授業を検討し、計画書を作成。実際に授業を実施し、その様子を動画撮影。
- 研修当日までに計画書と授業動画を、県のクラウド上の共有フォルダに提出。

【準備物】

- 授業計画書
- 授業動画

➡ 詳細は p.35

ワークショップ



グループ協議

グループ

- 指導主事を交えたグループで、各受講者が作成してきた授業動画や計画書を用いて協議を実施。
- 各受講者が自身の授業計画書を基に授業動画を説明しながら、グループ全員で動画を視聴。その後、他の受講者が質疑を行い、グループで意見交換を実施。
- 「説明→意見交換」の流れを、受講者の数だけ繰り返す。

【準備物】

- 授業動画視聴用の端末・モニター

➡ 詳細は p.36

研修後の取組

全体

- 指導主事が自身の担当したグループ内で、特に他の受講者の参考となる動画を選定。県が動画を再編集した上で、県のホームページに掲載。

受講者自身の実践の動画を持ち寄り、意見交換



詳しく
報告書で読む
(p.157～)

研修前の取組

取組のねらい

- 第1回研修で獲得したデジタル教科書の活用イメージを、具体的な授業実践に繋げる。

取組内容

■ 授業計画書の作成

- 各受講者に以下の条件で授業を検討してもらい、計画書を作成の上、授業を実施し、動画を撮影。
 - デジタル教科書を活用すること。
 - 「ALTとの効果的なチームティーチング」または「聞くことから話すことへつなぐ領域統合の言語活動」のいずれかを取り入れること。
 - 第1回研修で扱った<視点>を意識すること。

【本時の授業実践について】	
どちらにチャレンジするか、○を記入してください。(両方○も可)	
「ALTとの効果的なTT」	
「聞くこと」から「話すこと」へつなぐ領域統合の言語活動	
1. 学習者用デジタル教科書のどの機能を活用しますか？(学習者用デジタル教科書の機能)	
音声読み上げ	拡大機能
書き込み	共有・交流
その他()	
2. 教師や生徒の英語の発話量を増やすために、学習者用デジタル教科書の「1」の機能を具体的にどのように活用しますか？	

▲ 計画書の一部
活用するデジタル教科書の機能を
具体的な活用方法を記載

■ 授業動画の撮影・編集

- 撮影方法は、授業全体を撮影したものでも、ポイントとなるシーンのみ撮影したものでも良い。
- 定点映像だけでなく、個々の生徒の様子や端末の表示内容を撮影した映像や、授業のポイントを紹介するテロップを挿入すると分かりやすい。各受講者の判断で編集も実施。



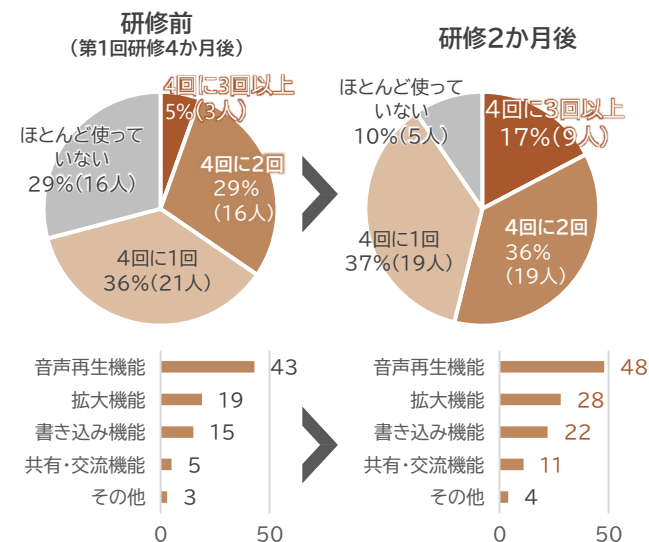
前段となる研修の内容を踏まえて、具体的な授業実践に接続

- 第1回研修では、デジタル教科書を活用した公開授業や、活用の意義を解説する講義が行われており、デジタル教科書の活用イメージを高めるための情報が受講者にインプットされていました。このインプットを踏まえて受講者が実際に授業実践を行う研修設計とすることで、研修のテーマに沿いつつ多様なデジタル教科書の活用事例を受講者から引き出すことが可能になります。
- 授業動画は再展開が容易なため、本研修後も更なる普及促進に繋げることができます。(福岡県教育庁 濱松 指導主事)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修以降のデジタル教科書の活用頻度 [N=52]



- 実際の授業実践を行ったことにより、デジタル教科書の活用頻度が向上し、90%の受講者が週4回に1回以上活用し、3回以上活用する者も増加した。
- 授業計画書で選択肢となっていたデジタル教科書の機能はいずれも活用頻度が高まった。

受講者自身の実践の動画を持ち寄り、意見交換



詳しく
報告書で読む
(p.157~)

ワークショップ



210分

グループ協議

取組のねらい

- 他の受講者の授業実践から、デジタル教科書の活用に関する新たな視点を得ることができる。
- 意見交換を通して、デジタル教科書を活用した授業をさらに改善することができる。

取組内容

■ グループ協議の流れ

1. グループのファシリテーションを担当する指導主事が、本研修のねらいや流れを説明する。
2. 受講者が自身の授業計画書を基に、授業の流れやデジタル教科書活用の成果・課題について説明しながら、グループ全員で授業動画を視聴する。
3. 他の受講者が質疑を行い、グループで意見交換を行う。
4. 2.~3.を受講者の数だけ繰り返す。
5. 最後に、指導主事が協議してきた内容を総括する。



◀ モニターに
授業映像を
投影し説明

■ 協議の進め方の工夫

- 質疑の時間を形式的なものとしな。2.の説明中であっても、受講者が「知りたい」と思ったタイミングで質問できるようにする。発表者側からも、受講者に対して「より良い活用は無いかなど、質問を投げかける。
- 指導主事が授業の深掘りをした後に、「デジタル教科書はどのような点で本文の内容理解に有効か」など、他の受講者も議論できる論点を抽出する。(研修の前に、指導主事同士で協議の論点等を打ち合わせしておくことも有効。)



ポイント解説

実践を通して得られた成果や課題、実践までの過程を共有

- 単にデジタル教科書の活用方法を紹介するのみに留まらず、実際の活用を通して見えてきた成果や課題についても意見交換することで、活用時の効果や留意点が明確になり、各受講者が自身の授業に置き換えてイメージすることができます。
- 授業動画という実践“結果”だけでなく、どのような情報を参考にしたのか、どのように生徒にICT活用を浸透させたのか等、実践に至るまでの“過程”も共有することで、受講者の事例の再現性を高めることが可能となります。(東京学芸大学 齋藤 教授)

取組結果

■ 受講者アンケートの結果

研修で満足した点(自由記述回答から抜粋)

- 動画を視聴することで、具体的なイメージがもて、参考にしたい点が沢山あった。デジタル教科書をどのように活用しているのか、あるいは活用すればいいのかを話し合えたので、同じ悩みがあることを知れた。
- 研究授業だと一つの実践しか見れないが、動画だといくつも討議や質問ができるので勉強になった。

研修以降に取り組んでいること(自由記述回答から抜粋)

- 校内の外国語科でデジタル教科書等の活用状況を話し合った。本研修の事前課題で作成した授業計画書を他の教員に配布し、授業公開を行った。
- 教科部会で研修内容を伝達した。グループ協議内で知った活用方法を紹介した。
- 他の教員の授業動画を見て、どんな授業展開をしているのか、時間があるときに学んでいる。良いと思った点があれば、自分の授業の参考にしている。
- 多くの受講者が、研修の学びを校内や地域に展開したり、他のグループの受講者の動画を視聴し、さらなる授業改善に繋がっていることがうかがえる。

Appendix

関連コンテンツ

本書のほかにも、令和6年度「学習者用デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」の成果は、以下にとりまとめています。あわせてご参照ください。

成果報告書

【デジタル教科書の活用に関する研修】

本事業に参加した各県の研修内容を詳述した報告書。各県が実施した2回の研修に関する研修計画の詳細や検討過程、研修効果の検証に関する諸情報(受講者へのアンケートの結果等)を掲載。



https://www.mext.go.jp/content/2025_0425-mxt_kyokasyo01-000041995_3.pdf



【デジタル教科書を活用した授業改善】

本事業の実証研究校での授業改善の取組を詳述した報告書。外国語／算数・数学の2教科について、小学校・中学校それぞれ2回ずつ授業実践に取り組み、その結果を掲載。



https://www.mext.go.jp/content/2025_0425-mxt_kyokasyo01-000041995_2.pdf

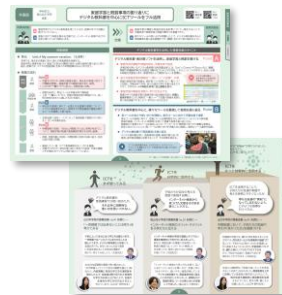


授業改善事例集

本事業の実証研究校での授業改善の取組について、1校1ページでコンパクトに紹介する事例集。外国語／算数・数学の別に小学校及び中学校から1校ずつ、授業の流れとデジタル教科書等を活用したポイントを紹介。加えて、各校の授業改善の過程を踏まえ、教科別によくある“お悩み”と解決のヒントも掲載。



https://www.mext.go.jp/content/2025_0425-mxt_kyokasyo01-000041995_4.pdf



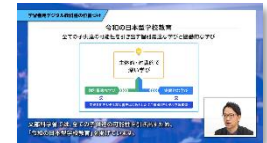
動画

【デジタル教科書の活用の意義を知る】

デジタル教科書の活用の意義を解説した10分程度の動画。これからの時代に求められる授業に対して、デジタル教科書がいかに有効かを、図解や実際の授業映像を用い、本事業の有識者から解説。



学習者用デジタル教科書活用の意義～これからの時代に求められる授業に向けて～ - YouTube



【デジタル教科書を活用した実践事例を知る】

外国語／算数・数学の別にデジタル教科書等を活用した授業改善の実践事例を紹介する10分程度の動画。具体的な授業の様子を有識者の解説も交えて紹介し、授業者・児童生徒のインタビューも収録。



学習者用デジタル教科書を活用した実践事例(外国語) - YouTube

(外国語)



学習者用デジタル教科書を活用した実践事例(算数・数学) - YouTube

(算数・数学)



リーフレット

本事業の事例から、デジタル教科書の活用ポイントを抽出し、授業の流れに沿ってまとめたリーフレット。活用ポイントごとに、これまでの事業で創出した実践事例の概要や動画のリンク先も掲載。デジタル教科書等の活用に向けて、まずは概観をつかむことを目的に、印刷すれば表裏両面の1枚紙になるよう、コンパクトに構成。



https://www.mext.go.jp/content/2025_0425-mxt_kyokasyo01-000041995_6.pdf



有識者会議委員・実証県一覧

（敬称略）

役割	氏名	所属・職名※	担当の実証県
主査	中川 一史	放送大学 教授	—
副査	小林 祐紀	放送大学 准教授	埼玉県
実証研究方針に係る指導・助言	高橋 瑞人	枚方市教育委員会事務局 学校教育部教育指導課 主幹	—
	中橋 雄	日本大学 教授	—
実証県での 研修に係る 指導助言	岩崎 有朋	札幌国際大学 教授	群馬県
	齋藤 嘉則	東京学芸大学 教授	福岡県
	佐藤 幸江	放送大学 客員教授	富山県・山梨県

※ 有識者会議委員の所属・職名は令和7年3月現在

事業委託者

文部科学省初等中等教育局

〒100-8959 東京都千代田区霞が関三丁目2番2号

事業受託者（制作）

アビームコンサルティング株式会社

〒104-0028 東京都中央区八重洲二丁目2番1号